

## はじめに

「スポーツの社会科学研究のこれまでとこれから」というタイトルを読まれて、いかにも仰々しいと感じられた方がいるかもしれない。やや簡単ではあるがその思いについてここで説明しておきたい。

直接的な着想の契機は、尾崎先生と坂上先生が2021年の3月末日をもって定年を迎えられたことにある。長年にわたって本ユニットに貢献されてきた先生方が遺されたものを的確に把握しておきたいと考えたのである。もうひとつは、一橋大学全体として荒波の中に進んでいかねばならない状況を踏まえていることである。本学は2019年に指定国立大学に選ばれたが、その維持のために高い目標値が設定されている。たとえば、国際水準の研究者集団を形成しなければならないこと、英文業績数2023年の目標値は年間200本などの目標が先日学長から発表された。我々のユニットも、こうした動きにどのように貢献していけるかが重要となっており、具体的に未来について考えることが重要になっているのである。

そのような中では、これまで当ユニットに蓄積されてきたものを踏まえて、これから踏み出す一步を考えなくてはならない。一橋大学は人文科学（哲学や歴史学など）を含む社会科学における世界最高水準の教育研究拠点の形成に資することを目指しているが、われわれユニットも「スポーツの社会科学研究」の分野でその一翼を担わなければならないのである。そうした意識の中で本誌をまとめたのであった。

こうした経緯を踏まえて、2022年度版のコンテンツは例年の個別研究報告に加えて、イベント報告を加えている。本誌はまず、そのイベントについての岡本報告から始まる。この度、尾崎先生および坂上先生のご退職に間に合わせる形で「一橋スポーツ科学研究会」を発足させた。岡本報告ではなぜそのような研究会を発足させたのかについて説明している。続くテーマ詳細の報告では、尾崎先生および坂上先生の研究成果を研究室の卒業生が振り返り、その後、両先生がなぜそのような取り組みをされてきたのかをご自身が解説する。そこではお二人の人物が表出しており、学術的な記述ではあるものの、「ほっこり」できてしまうところがある。

つづいては例年どおりの、教員と院生による研究発表、ゲスト研究会の報告である。ここでは経営学や歴史学、哲学といった分野の幅広さを意識してコンテンツを揃えている。まず中村研究ノートでは、企業陸上部のあるべき未来展望に関する試案が報告されている。これは、スポーツマネジメント研究者の視点から経済的・経営的にみている企業陸上部にどのような課題があるかを明らかにし、その対策について説明している。

次に武井論文では、1990年代以降に統計や新聞紙上でウォーキングという言葉が注目されてきたが、そうしたウォーキングという言葉で実際何を捉えているのかが見過ごされてきたという課題を深く掘り下げている。続く佐用研究ノートは、明治から大正にかけて嘉納治五郎が柔道を形成し普及させたと言われてきたが、実際にどのように普及したのか、その波及の仕方についての研究である。またゲスト研究会の報告では、社会学研究科の助手である加藤洋介氏をお招きし、翻訳された『トライアスロンの哲学』について解説頂いている。

本年度のコンテンツは以上のとおりである。タイトル通りのコンテンツになっているか、ぜひとも読者の方々の判断を仰ぎたい。

2023年2月13日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 中村 英仁